

# 中年期の多次元的自己概念における発達的特徴<sup>1</sup>

——自己に対する関心と評価の交互作用という観点から——

若本純子\* 無藤隆\*\*

本研究は、30-65歳の中年期男女1006名を対象に、中年期の多次元的自己概念における発達的特徴について検討した。第1に、発達的差異の検証によって、中年期には前期・後期の2つの段階が見出された。中年後期は高自尊感情・低関心・高自己評価という特徴を持ち、他の時期との間に有意な差を示した。第2に、自己の諸領域に対する関心と評価の交互作用と自尊感情との関連を検証したところ、交互作用が有意だったのは男・中年前期における内的自己と社会的自己、女・中年前期における内的自己、女・プレ中年期における社会的自己であった。さらに、交互作用が有意であった自己の領域は、中年期に特有とされる変化の端緒にあり、内省・葛藤が喚起されやすいものであることが示された。加えて、中年前期・プレ中年期には、中年期特有の経験を反映した自己領域に対して、関心が低い場合に、自尊感情の不安定性というリスク状況を呈することが示唆された。最後に、本研究で独自に設定された「関心」という変数の機能と中年期研究に対する意義について議論された。

キーワード：中年期、多次元的自己概念、自尊感情、自己に対する関心と評価の交互作用

## 問題と目的

中年期は生涯発達の空白領域と言われてきたが、社会的関心の高まりもある中、徐々に知見が蓄積されつつある。先行研究が共通して言及するのは、人生で初めて衰え (Whitbourne, 2002) や限界 (Helson, 1997) に直面するなど、中年期がそれまでの獲得優位から喪失が中心となる発達様態への移行を迎えるという点である (Heckhausen, Dixon, & Baltes, 1989)。岡本 (1995) は、これら中年期を特徴づける経験を、自己の体力や身体機能の衰え、社会的な限界の認知、時間的展望の狭まりと逆転、老いや死への不安、多重の社会的役割による物理的・心理的負荷として総括している。しかし、これらの経験が与える心理的影響についての見解は一致していない。力動的観点の中年期研究では、Jung の中年期を「人生の正午」とする理論モデル、および Erikson の心理社会的発達理論を基盤に、アイデンティティ (e.g., 岡本, 1995) や生活構造 (Levinson, 1978) などに注目しつつ、包括的な人格発達が論じられている。

そこではそれまでの人生を問い直し再構築する「分岐点」としての意味が重視され、中年期の危機への主体的取り組みが後半生の発達を決定づけると言われる。一方、生涯発達の観点の研究では、喪失や有限性の存在に言及しながらも、中年期は経験知と機能的発達、心理的資源の豊かさによって、最も適応的な時期であるとの視座に立つ (e.g., Lachman & Baltes, 1994; Staudinger & Bluck, 2001)。たとえば、情緒の肯定性と安定性 (e.g., Carstensen, Pasupathi, Mayr, & Nesselroade, 2000)、その結果としての高 well-being (Mroczek & Kolarz, 1998)、論理的思考・曖昧さへの耐性・目標設定の柔軟性の増加 (Helson & Wink, 1992) などが示されている。両視座の知見を総合すると、中年期は、衰えや有限性の経験によって特徴づけられる時期にもかかわらず、高水準の心理的安定や適応状態が保持されることが窺われる。この一見矛盾する中年期心性は多くの研究者の耳目を集めながら、その機序や様相についての諸説ははまだ仮説の域にあり、より一層の、そして広い視野からの議論が待たれる。

このような中年期特有の経験が及ぼす心理的影響を抽出する枠組として、本研究では、自己を認知的・情緒的構造 (Harter, 1998) として、またその内容を自己概念として (遠藤, 1992) 捉えた上で、自己をめぐる認知過程に注目する。経験や外的要因が自己および自己概念によって媒介され個人差を生じることは多くの研究によって指摘され、実証されている (e.g., Lyubomirsky,

\* お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科  
ICF14968@nifty.com

\*\* 白梅学園短期大学

<sup>1</sup> 発達という用語についての理解は立場・研究者によってさまざまである。本研究では、Baltes (1987) の、構造的・文脈的要求が発達を特徴づけるとの見解を踏まえ、中年期という時期の持つ特徴との相互作用によって生じる心理過程や行動を「発達の」であると見なし、用語として用いる。

2001;中村,1990)。中年期研究においても、統制感などの自己概念が多重役割や社会的責任のストレスを緩和すると指摘される(Lachman & Bertrand,2001)ように、この枠組が中年期に特有な経験をめぐる心理過程に関して有用であることが示唆される。多岐にわたる自己概念の中で、全般的な情緒的自己概念と定義づけられるのが自尊感情である(遠藤,1992)。自尊感情は青年期以降の適応指標として最も多用され(菅沼,1997)、中年期心性を代表可能な変数と言える。だが、我々の自己への注目と評価は個別の領域や部分に対して行われ、自尊感情はその全般的ゆえに、日常的な感覚としては意識されにくい(e.g.,水間,2002)。この指摘は中年期発達研究と照合するとき見過ごせないものである。というのも、中年期の変化は多次元的で(Whitbourne,2002)、自己の諸領域の変化は独立して感じられる(Baltes,1993)との言及が示すとおり、中年期の発達は多くの機能領域で個別に展開するため、自己の全体と諸側面双方への注目が必要だからである。これを可能にするのが自己を多面的・多次元的に捉える枠組である。代表的なモデルに重要性という次元を導入したものがあ(井上,1992)。たとえばMarsh(1986)は、Rosenbergの重要性と評価の交互作用モデル——多面的自己の各領域に対する評価の効果は重要性に依存し、高い重要性を持つ領域に対する評価が自尊感情へ高く寄与する——を検証し、重要性が高い自己の領域では交互作用が有意であったことを指摘した。また、発達に応じて自己のどの領域が重要かは異なるというHarter(1998)の主張からは、重要性と評価との交互作用も発達的特徴を反映すると推察される。これらを勘案すると、重要性が付された自己の領域では交互作用が有意であり、その領域は中年期の特徴を色濃く反映するであろうとの仮定が導出される。

ここで、中年期の特徴を鑑み、重要性という次元を再考したい。重要性は自尊感情への肯定的な寄与を前提とする(尾崎,2002)自己に対する積極的な関与である。重要性を用いた交互作用モデルはその中核性ゆえ自己評価に強い効果を持つとの仮定に立脚する。しかし、中年期の、衰え、限界など、不可避だが肯定的な意味づけが困難な経験から喚起される関与は「気になる」のような「受動的な」形態をも取りうる。このような「焦りや後悔」の調整が中年期発達の鍵になるとするHeckhausen(2001)の指摘は看過すべきではなからう。他方、自己研究において、評価への影響を持つ次元は「常に意識しているか/関与しているか」(井上,1992)、「日頃どの程度気にかけて考えているか」(水間,

2002)と説明されるように、日常的な注目や考慮の程度を的確に抽出することも必要とされる。よって、中年期研究においては、肯定的・積極的な意味づけのみならず、懸念、焦りや後悔、葛藤などを含む広い意味での関与を適用することが交互作用モデルの有効性を高めるものと思われる。そこで、本研究では、中年期の変化によって喚起される自己に対する広範囲な関与を「関心」と命名し、重要性に代えて使用する。

以上を総合し、本研究の第1の目的として、中年期の多次元的自己概念の発達差と性差を検討する。従来先行研究でも性差や発達差が示されてきたが(e.g.,Helson,1997;上瀬,1999;沢崎,1995)、中年期内の差異や変化についての検証が不十分であると指摘されている(Heckhausen,2001)。本研究では、Staudinger & Bluck(2001)の見解に依拠し(中年期:40-65歳)、「中年前期」(40代)と「中年後期」(50代-65歳)の差異を明らかにする。その際30代を「プレ中年期」として配置した3群での比較検討を行う。本検討からは、先行研究同様、高年齢群ほど自尊感情や自己評価は高いといった発達差と、女性では身体面への関心が高く評価が低いといった性差が看取されるだろう。第2の目的として、多面的自己に対する関心と評価の交互作用と自尊感情との関連から、中年期の自己概念の特徴を明らかにする。Marsh(1986)の知見により、高関心×高評価が最も高い自尊感情を説明し、高関心×低評価が最も低い自尊感情を説明するとの交互作用が予測される。さらに、交互作用結果が発達的特徴を反映するとの見解(cf. Harter,1998)に基づき、交互作用結果を中年期発達の理論的・実証的知見と対応させながら具体的な自己像を記述・解釈した上で、その発達の意味を考察する。

## 方 法

質問紙調査を実施。**対象者** 30-65歳の男女1800名  
**時期** 2001年6-7月 **手続** 筆者の知人・友人に郵送・手渡しにて個別依頼 **内容** ①多面的自己に対する関心・評価:予備面接<sup>2</sup>から得られた知見,Goldenberg, McCoy, Pyszczynski, Greenberg, & Solomon(2000)のBody-Identification Questionnaire,沢崎(1995)の自己受容尺度の項目を参考に尺度を構成。16項目。積極的・受動的関与を表す「関心」では「どの程度気にかけているか/気になるか」、「評価」では、井上(1992)の指摘に準じ、「どの程度満足しているか」の評定を求めた。5段階評定。②Rosenberg自尊感情

<sup>2</sup> 2001年4-5月、30-50代の男女9名を対象に実施した。

尺度：10項目。5段階評定。回収・分析対象 回収1020名の内、年齢未記入、不完全回答、無職・定年退職者を除外 (cf. 山本・ワップナー, 1992) した1006名 (有効回答率55.9%；年齢  $M (SD) = 45.66 (9.32)$ ；内訳：TABLE 1)

結 果

**因子分析 (主因子法・プロマックス回転)** 多面的自己に対する関心・評価尺度の因子分析を実施し、おのおの4因子を抽出した (TABLE 2)<sup>3</sup>。第1因子は身体機能や外見が負荷したため「身体的自己」と命名した。第2因子は個人の中核である心理社会面の項目が負荷したため「内的自己」と命名した。第3因子は個人の社会的側面が示されたため「社会的自己」と命名した。第4因子には、日常的感觉を反映する明細化されにくい生活実感が負荷を示したため「生活的自己」と命名した。また、自尊感情尺度では、固有値の差から先行研究同様1因子が見出された。

**合成変数構成と内的整合性** 各因子項目の素点を合計、項目数で除し合成変数を構成した。各  $\alpha$  係数は、関心：身体的自己 (.76)、内的自己 (.76)、社会的自己 (.75)、生活的自己 (.73)、評価：身体的自己 (.74)、内的自己 (.71)、社会的自己 (.73)、生活的自己 (.72)、自尊感情 (.80) であり、内的整合性が確認された。

**性・期による差の検討<sup>4</sup>** 性 (男・女)・期 (プレ・前期・後期) による差を検討するため二元配置の分散分析を実施したところ、すべての変数に性および期の主効果が見られ、交互作用は見られなかった (TABLE 3)。分散分析結果を概観すると、身体的自己をめぐって性の主効果が見られ、すべての変数において期の主効果が見

TABLE 1 性別×年齢別サンプル度数 (%)

	プレ中年期	中年前期	中年後期	合計
男	123(12.2)	113(11.2)	132(13.1)	368(36.5)
女	200(19.9)	201(20.0)	237(23.6)	638(63.5)
合計	323(32.1)	314(31.2)	369(36.7)	1006(100.0)

<sup>3</sup> 複数因子に負荷する項目が見られたが、後の分析および結果解釈の妥当性を考慮し、関心と評価の各因子は同項目によって構成した。

<sup>4</sup> 従来の研究において、職業やライフコースによる差が指摘される (e.g., 堀内, 1993) が、本研究で用いた変数では、職業、ライフコースによる差が見られないことが確認されている。尚、本サンプルにおける職業内訳の上位のものは、男性：事務・技術・管理職45.4%、教職・専門職16.6%、販売・サービス職13.0%、女性：専業主婦31.0%、事務・技術・管理職22.7%、教職・専門職17.1%であった。

TABLE 2-1 多面的自己に対する関心因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	F1 社会的 自己	F2 内的 自己	F3 身体的 自己	F4 生活的 自己	共通性
社会的立場	.829	.015	.086	-.079	.683
仕事	.743	.103	.144	.100	.634
役割	.676	.194	.016	.059	.574
性的能力	.599	-.215	.349	.007	.494
情緒	.130	.849	.056	.002	.681
性格	.057	.832	.054	.032	.712
人間関係	.229	.698	-.040	-.090	.603
家族	.139	.387	-.024	.284	.417
知性	.259	.370	.292	.029	.501
肌	.043	.037	.806	-.010	.645
容貌	.135	.069	.745	.004	.702
体型	.035	.026	.717	.111	.582
体力	.095	.052	.094	.850	.693
健康状態	-.071	.070	.070	.743	.606
経済状態	.427	-.092	-.087	.524	.512
生活	.243	.305	-.056	.454	.600
因子寄与	4.56	4.29	3.50	3.31	
因子間相関	-				
	.32	-			
	.33	.42			
	.29	.32	.32	-	

TABLE 2-2 多面的自己に対する評価因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	F1 身体的 自己	F2 内的 自己	F3 社会的 自己	F4 生活的 自己	共通性
肌	.765	.064	-.068	-.029	.575
容貌	.669	-.091	.197	.135	.607
知性	.613	.154	.092	-.034	.500
性的能力	.575	.040	.127	.050	.440
体型	.543	-.172	-.063	.404	.485
情緒	.174	.750	-.047	-.023	.631
性格	.235	.744	-.083	-.021	.651
人間関係	-.037	.704	.067	-.010	.518
家族	-.193	.625	.041	.117	.420
仕事	.029	-.077	.824	.019	.657
社会的立場	.221	-.058	.781	-.144	.664
役割	.075	.188	.637	-.096	.542
経済状態	-.114	-.012	.485	.433	.500
体力	.115	.038	-.052	.790	.684
健康状態	.112	.042	-.096	.783	.652
生活	-.161	.303	.410	.396	.617
因子寄与	3.75	3.49	3.64	3.21	
因子間相関	-				
	.48	-			
	.35	.40	-		
	.38	.45	.36	-	

TABLE 3 性×期による二元配置分散分析結果(基準変数：自尊感情)と平均値(SD)

	男			女		
	プレ	前期	後期	プレ	前期	後期
自己に対する関心						
身体的	2.78(.81)	2.90(.74)	2.73(.79)	3.55(.74)	3.49(.75)	3.26(.76)
内的	3.13(.85)	3.12(.91)	2.82(.81)	3.52(.83)	3.40(.89)	3.07(.84)
社会的	3.35(.91)	3.33(.91)	3.09(.97)	3.46(.88)	3.44(.87)	2.95(.89)
生活的	3.44(.84)	3.48(.77)	3.27(.83)	3.57(.70)	3.70(.81)	3.44(.83)
自己に対する評価						
身体的	3.33(.62)	3.39(.59)	3.43(.59)	2.98(.71)	3.11(.74)	3.20(.72)
内的	3.64(.61)	3.56(.74)	3.69(.60)	3.51(.74)	3.65(.64)	3.72(.63)
社会的	3.39(.70)	3.36(.75)	3.53(.67)	3.27(.75)	3.41(.80)	3.52(.64)
生活的	3.11(.77)	3.15(.74)	3.40(.71)	3.18(.76)	3.21(.79)	3.45(.77)
自尊感情	3.55(.56)	3.51(.55)	3.60(.53)	3.39(.62)	3.53(.63)	3.58(.60)

TABLE 3 続き

	F値	主効果		交互作用	期・多重比較 (TUKEY)
		性	期		
自己に対する関心					
身体的	35.14***	155.71***	8.43***	2.14	①②>③
内的	14.44***	30.21***	20.93***	.59	①②>③
社会的	10.58***	.10	24.28***	2.08	②①>③
生活的	5.50***	11.20***	7.95***	.24	②①>③
自己に対する評価					
身体的	10.55***	41.17***	5.63**	.59	③>②
内的	2.64*	.02	4.41*	2.17	③>②
社会的	3.37**	.43	7.27***	.98	③>②①
生活的	5.59***	1.28	13.24***	.01	③>②①
自尊感情	2.83*	1.7	4.51*	1.80	③>②

注)\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$  ①: プレ中年期 ②: 中年前期 ③: 中年後期

られた。また、多重比較の結果、中年後期は、他の2群と比較して、関心では有意に低い得点を示し、評価、自尊感情では有意に高い得点を示した。

**関心・評価の交互作用の検討** 自己の領域(身体的, 内的, 社会的, 生活的)別に、自尊感情を基準変数、予測変数を①関心+評価、②関心+評価+関心×評価とする階層的重回帰分析を実施した。その際、使用変数における性と期の効果の影響を除くため、性×期×自己領域別の全24位相で分析を実施した<sup>5</sup>。その中で、関心と評価の交互作用が有意だったのは、男・中年前期の内的

自己と社会的自己 ( $p < .05$ )、女・プレ中年期の社会的自己、女・中年前期の内的自己 ( $p < .10$ )であった(TABLE 5)。これらを、関心、評価それぞれの平均値-1SD(低群)、平均値+1SD(高群)を用いて2変数の交互作用関係を図示したところ、すべて同様の傾向を示し(例: 男・中年前期の社会的自己: FIGURE 1)、低関心×高評価の場合に自尊感情が最も高く、低関心×低評価の場合に最も低かった。

## 考 察

**中年期の自己概念の構造** 中年期の多面的自己をめぐる自己概念は4領域から構成された。身体的自己は外見・能力などの衰えが感じられやすい側面から、社会的自己は役割や地位から構成され、いずれも中年期の心性を反映すると言えよう。そして、内的自己に人間関係が含まれた点は、日本人の自己が相互協調的自己観から関係性と深く結びついているとの指摘(北山, 1994)と一致する。すでに、成人女性の発達において関

<sup>5</sup> 階層的重回帰分析は、新井(2001)の手續に則り、予測変数間の高相関に配慮し変数を偏差に変換した(変換後の相関係数: TABLE 4)。また、多重共線性の影響に関して、本研究では、①説明変数同士の相関が中程度( $r \leq |.57|$ )で、 $\beta$ 係数値も妥当な範囲( $\beta \leq |.56|$ )であること、加えて相関係数と $\beta$ 係数の値に顕著な差が見られなかったこと、②多重共線性の診断基準の1つとされる各説明変数のVIF値の許容度に特に低い値が見られなかったこと、③結果の有意な解釈が可能であったことから、問題ないと判断した。

TABLE 4 重回帰分析に用いられる全変数の相関係数行列

	男			女		
	プレ	前期	後期	プレ	前期	後期
身体的自己						
自尊-関心	-.23*	-.29**	-.16	-.25***	-.25***	-.16*
自尊-評価	.40***	.36***	.32***	.35***	.43***	.34***
自尊-関心×評価	.11	.16	.10	.02	.20**	.16*
関心-評価	.56***	.48***	.49***	.50***	.50***	.39***
関心-関心×評価	.02	.27**	-.11	.04	.09	.11
評価-関心×評価	.10	.03	.29***	.27***	.34***	.30***
内的自己						
自尊-関心	-.31***	-.30**	-.38***	-.33***	.38***	-.24***
自尊-評価	.43***	.48***	.59***	.55***	.52***	.47***
自尊-関心×評価	-.09	-.04	.10	.18*	.00	.09
関心-評価	.42***	-.48***	-.53***	-.43***	.46***	.40***
関心-関心×評価	.05	.01	-.07	.10	.15*	.09
評価-関心×評価	.05	.30**	.31***	.42***	.29***	.29***
社会的自己						
自尊-関心	-.17	.05	.17	.16*	-.14*	-.05
自尊-評価	.41***	.40***	.35***	.37***	.32***	.32***
自尊-関心×評価	-.13	-.06	.01	.07	.02	.11
関心-評価	-.26**	-.26**	-.30***	-.39***	-.31***	.15*
関心-関心×評価	.16	.31***	.05	-.05	-.10	.08
評価-関心×評価	-.07	.28**	.25**	.47***	.23***	.17**
生活的自己						
自尊-関心	-.16	.28**	.23**	.27***	.27***	-.19**
自尊-評価	.41***	.33***	.32***	.36***	.44***	.32***
自尊-関心×評価	-.01	-.07	.02	.07	.06	.13
関心-評価	-.51***	-.53***	-.57***	-.51***	.53***	-.54***
関心-関心×評価	.23**	.13	.12	-.07	.29***	.17**
評価-関心×評価	.02	.22*	.18*	.32***	.12	.27***

注) \*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ 

関心, 評価および関心×評価の値は偏差への変換後の値を用いた。

係性が果たす役割は実証されているが、関係性の発達の意義は男女を問わない(岡本, 2002)との指摘に傍証される結果と言える。さらに、本研究で見出された「生活的自己」という領域は、中年期成人の独自性を示すものと考えられる。沢崎(1995)は、成人を対象とした多面的自己における自己受容の検討の中で、「体力」を身体的自己、「経済」を社会的自己としているが、本研究では独立した1因子を形成した。青年期で確立された尺度が成人期に適用された沢崎の研究では、用いられた下位分類も青年期的意味づけを反映したものであろう。ならば、今回見出された差異は中年期と青年期の心性の差異と見なせよう。中年期成人の面接調査において「日々の生活をこなすことが精一杯で、自分のことをあれこれ考えることは少ない」との言は頻繁に聞かれる。本研究の結果からは、成人の心理過程の前景は生活に関する表層的なものであり、その他の多面的・個別的自己は何らかのきっかけ(e.g., 中年期的変化)や意図により賦活されるという二重構造を持つものと推測される。

**中年期の自己概念の性差と発達差：分散分析の結果から** 中年期の自己概念の性・期による比較検討からは、仮説どおり発達差と性差が見出された。Helsonは、多くの検討から、性差が資源と基準の違いに由来すると言う(Helson, 1997)。本研究における女性が男性より身体への評価が低い(沢崎, 1995も同様)という性差は、若さや美が女性の価値基準として影響力を持つ現状を物語る。また、女性の多面的自己に対するより高い関心(社会的自己は性差なし)は、女性は自己に関心を向けやすく、可変的で柔軟なものと捉えたとの報告(上瀬, 1999)と呼応する結果であろう。

一方、多元的自己概念において、中年前期・プレ中年期と中年後期との間に有意差があったという結果については、40代では「社会的時計」とのずれを気にするが、50代では期待に添おうという感覚は消失すると説明(Helson, 1997)が有用であろう。この背景として、出世や出産といったライフイベントの最終期限を境として、中年前期は焦りや努力が喚起されるが、中年後期では補償や非関与へと転換することが示唆され

**TABLE 5** 自尊感情を基準変数，関心，評価，関心×評価を説明変数とする階層的重回帰分析結果（自己の領域×性×期別）

## a 身体的自己

	第1回			第2回			$\Delta R^2$	
	$\beta$		$R^2$	$\beta$		$R^2$		
	関心	評価		関心	評価			関×評
プレ	-.007	.393	.159***	-.014	.405	.115	.173***	.015
男								
前期	-.151	.290	.149***	.108	.307	.124	.163***	.014
後期	.004	.322	.105***	.004	.319	.010	.105**	.000
女								
プレ	-.105	.298	.131***	.088	.326	.070	.136***	.004
前期	.043	.412	.190***	.074	.368	.086	.196***	.006
後期	-.033	.331	.119***	.053	.301	.073	.124***	.005

## b 内的自己

	第1回			第2回			$\Delta R^2$	
	$\beta$		$R^2$	$\beta$		$R^2$		
	関心	評価		関心	評価			関×評
プレ	-.155	.360	.201***	.146	.368	-.097	.210***	.009
男								
前期	.088	.441	.240***	-.049	.520	.200	.275***	.035*
後期	-.099	.533	.351***	.088	.563	.079	.356***	.006
女								
プレ	.118	.497	.311***	.114	.522	.055	.314***	.003
前期	.177	.441	.298***	.132	.197	.127	.311***	.013
後期	-.060	.443	.221***	.052	.456	-.033	.222***	.001

## c 社会的自己

	第1回			第2回			$\Delta R^2$	
	$\beta$		$R^2$	$\beta$		$R^2$		
	関心	評価		関心	評価			関×評
プレ	.066	.393	.172***	-.051	.390	.095	.181***	.009
男								
前期	.058	.411	.160***	.160	.507	-.252	.209***	.049*
後期	.073	.324	.124***	-.061	.351	.097	.133***	.009
女								
プレ	.025	.364	.140***	-.005	.436	.135	.154***	.014
前期	-.049	.305	.105***	-.052	.329	.105	.115***	.010
後期	.006	.314	.099***	-.012	.304	.056	.102***	.003

## d 生活的自己

	第1回			第2回			$\Delta R^2$	
	$\beta$		$R^2$	$\beta$		$R^2$		
	関心	評価		関心	評価			関×評
プレ	.064	.441	.170***	.076	.448	.038	.171***	.001
男								
前期	.144	.254	.124***	.104	.301	-.120	.137**	.013
後期	-.066	.279	.103***	.057	.289	.027	.104**	.001
女								
プレ	-.114	.302	.139***	-.109	.318	-.043	.140***	.002
前期	-.057	.410	.196***	-.076	.396	.039	.197***	.001
後期	-.035	.301	.103***	-.069	.263	.077	.107***	.005

注) \*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , -:  $p < .10$

ている (Heckhausen, 2001)。本研究の結果では，中年後期における関心の有意な低下はその反映だろう。したがって，従来指摘されてきた中年後期の心理的安定や高い適応とは，身のほどを知り（多面的自己に対する評価の安定），手の届くものでよしとし（関心対象の転換），ほどほどに無理をしない（関心や努力の低下）という過程 (cf. Baltes, 1987) によって成立すると考えられる。しかし，これが後も継続するのか中年後期独自のものであるかという疑問が残され，老年期まで対象を拡大して検討する必要がある。他方，中年前期については，差の検討からは後期との違いが明らかになるに留まったが，

交互作用の検討において注目する結果が得られたため次項にて詳述する。また，30代であるプレ中年期は，本研究では中年前期と峻別されなかった。先行研究には30代と40代の差を指摘するものもあり (e.g., Helson, 1997; 廣田, 2003; Levinson, 1978)，検討の余地を残したと言える。

**中年期の自己概念の発達の特徴：交互作用の結果から** 第2の目的として，多面的自己の各領域に対する関心と評価の交互作用によって中年期の自己概念の特徴を検討した結果，事前の仮説は支持されず，低関心×高評価で自尊感情が最も高く，低関心×低評価の場合

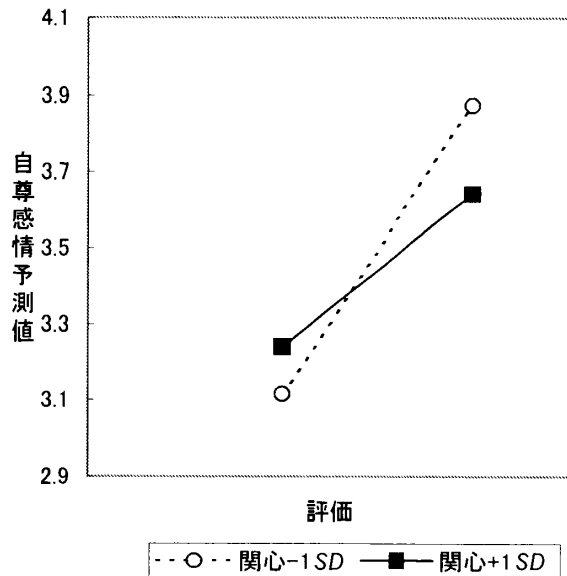


FIGURE 1 男・中年前期 社会的自己における関心と評価の交互作用により予測される自尊感情得点

に自尊感情が最も低かった。また、交互作用が有意であった自己の領域はいずれもプレ中年期と中年前期に属し、上述した中年後期との差異とも関連することが示唆された。そこで、交互作用が有意であった自己の領域を個別に検討していくこととする。

まず男性の中年前期における社会的自己、内的自己とはどのような状況を反映しているのか。Levinson (1978) は40-45歳頃を“midlife transition”とし、生活構造の再吟味と修正、自己に潜在する両極性の解決という課題を示した。これらは中年前期の社会的自己と内的自己をめぐる心理的課題と理解される。より日常的・具体的視点からは、この時期、大卒者の出世への動機づけが低下するとの指摘がある (Howard & Bray, 1988)。そこには、出世の限界や職場の人間関係の困難による仕事に対する見方の転換が示唆されよう。他方、結婚の最終期限 (Heckhausen, 2001; Helson, 1997) など私生活での限界への直面と葛藤も指摘されている。それでは、女性の中年前期における内的自己、プレ中年期における社会的自己はどうだろう。中年前期は、子どもの受験そして子離れを迎える時期である。若本(2003)は、受験の悩みは、中年期成人が報告する家族関係の緊張と葛藤に関連することを示唆している。また、子育てからの解放が自己を問直す機会となることは、諸家が指摘するところである (e.g., 岡本, 1995)。情緒面では更年期のホルモンバランスの変化による変調 (Whitbourne, 2002) にも配慮が必要であろう。一方、プ

レ中年期は、結婚、出産の時期である。これらがライフコースや価値観によって選択可能な対象となった反面、社会規範はいまだ母親による子育てをよとする現代 (柏木・永久, 1999)、役割葛藤や選択をめぐる悩みはこの時期の女性に必然の発達の課題と見なせよう。すなわち、交互作用項が有意だったのは、多面的自己をめぐる関心——中年期的変化に直面しての焦りや後悔を含む内省・葛藤、または積極的関与——が高まる時期と領域であることが推察された。さらに、プレ中年期および中年前期のみで交互作用が有意であった点については、中年期的変化の影響の大きさから説明可能と思われる。Montepare & Lachman (1989), Whitbourne (2002) は、40代頃から始まる衰えの経験はその端緒において最も顕著な影響を持つと示唆する。本研究の結果と照合すると、中年期的変化はプレ、中年前期において始まり、その影響を受けた自己の領域に対する関心の個人差が顕在化して交互作用が有意になった、一方、中年後期は変化の静穏化あるいは変化への慣れによって心理的影響が低下し、交互作用が有意でなかったと解釈できるだろう。

ところで、別の視点から交互作用結果を見直すと、高関心の場合と比較して、低関心の場合には評価得点の増減に伴う自尊感情得点の上昇・低下が大きく、部分的な自己評価の変化が自尊感情のより大きな変動へと繋がると理解される (FIGURE 1)。これは部分的自己評価の変動によって引き起こされる自尊感情の不安定さと考えることができる。自尊感情の安定性に関しては、Kernis らのグループが水準と安定性の二次元からなる地位 (status) ごとに状態像を記述している。それによると不安定群では、高水準の場合は過度に自己高揚的、低水準の場合には回避的であるなどの心理学的困難を有する (e.g., Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993)。したがって、中年期的変化を反映する特定の自己領域に関して低関心である場合、不安定な自尊感情を持ち、Kernis らの示す状態像に見られるような適応上/発達上のリスクを有する可能性が推測される。

**関心の再吟味：課題と展望** 上述した低関心をめぐるリスクについての議論は、逆に、衰えなどの変化の影響下にある多面的自己に対して適度な関心を払うことが、自尊感情の揺らぎというリスクを緩和する、とも捉えうる。このように、多面的自己に対する関心は、中年期における自己概念の発達において重要な役割を果たすと目されるため、ここで改めて吟味する。

関心は、中年期が衰えや限界などの経験を伴う時期であることを鑑み、積極・受動双方向の関与として独

自に設定されたが、元の次元「重要性」とは逆に低い関与の状態が突出した。この結果は、関与の質によらず、中年期特有の経験の影響下にある自己領域に対して適度な関心を向けることの重要性を示唆し、発達研究の知見とも呼応する (e.g., Heckhausen, 2001)。さらに、交互作用の有意が中年期的変化の端緒であるプレ・中年前期に見られたとの知見を併せると、関心は、吟味・熟考を経る心理過程というよりは、中村 (1990) が示した、刺激によって喚起される自己過程の第1段階「自己の姿への注目」のような過程を表すとの推察が適当と考えられる。関心を自己への注意過程と想定するとき、低関心像は安田・佐藤 (2000) の「抑圧型」と類似する。安田らによれば、「抑圧型」はネガティブな刺激や状態に対して適切な注意持続がなされないという認知的特徴を持つ。この点、本研究において交互作用が有意な4自己領域において低関心である個人とは「抑圧型」の認知的特徴を持つものと考えられる。さらに、安田らは「抑圧型」のもつ肯定的偏向が適応的かという議論の中で、その固定性ゆえに適応的とは言えないこと、状況に応じた可変的、柔軟な認知構造が適応にとって重要であることを指摘した。これは、たとえば Baltes (1987) などが示した加齢に伴い認知や方略を転換させる成人発達過程と通底するものである。ここから、本研究で示された、関心と評価の交互作用が中年期的変化の影響下にある部分で有意となり、その他では有意でなかったことは、自己概念をめぐる認知過程が、プレ・前期・後期の特徴に対応して柔軟にその機能を変容させているとの理解が可能であり、中年期発達的一端を示したものと思われる。一方で、それらの知見は、中年期に特有の変化や経験が研究モデル内に導入されないまま、先行研究との照合によって得られた解釈の域を出ていない。また、関心についての吟味も不足している。今後、中年期的変化を組み入れた研究モデルに基づく検討、そして、関心の妥当性や性質についての精査が求められる。

### 引用文献

- 新井幸子 2001 理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響 心理学研究, **72**, 315-321. (Arai, S. 2001 The effect of ideal-real self discrepancy and irrational belief on self acceptance. *Japanese Journal of Psychology*, **72**, 315-321.)
- Baltes, P.B. 1987 Theoretical propositions of life-span developmental psychology : On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, **23**, 611-626.
- Baltes, P.B. 1993 The aging mind : Potential and limits. *Gerontologist*, **33**, 580-594.
- Carstensen, L. L., Pasupathi, M., Mayr, U., & Nesselroade, J. R. 2000 Emotional experience in everyday life across the adult life span. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 644-655.
- 遠藤由美 1992 個性化された評価基準からの自尊心再考 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版 Pp. 57-70.
- Goldenberg, J. L., McCoy, S. K., Pyszczynski, T., Greenberg, J., & Solomon, S. 2000 The body as a source of self-esteem : The effect of mortality salience on identification with one's body, interest in sex, and appearance monitoring. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 118-130.
- Harter, S. 1998 The development of self-representation. In W. Damon & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology : Vol.3. Social, emotional, and personality development (5<sup>th</sup> ed.)*. New York : Wiley. Pp.553-617.
- Heckhausen, J. 2001 Adaptation and resilience in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development*. New York : John Wiley & Sons, Inc. Pp.345-394.
- Heckhausen, J., Dixon, R. A., & Baltes, P. B. 1989 Gains and losses in development throughout adulthood as perceived by different adult age groups. *Developmental Psychology*, **25**, 109-121.
- Helson, R. 1997 The self in middle age. In M. E. Lachman & J. B. James (Eds.), *Multiple paths of midlife development*. Chicago : The University of Chicago Press. Pp.21-43.
- Helson, R., & Wink, P. 1992 Personality change in women from the early 40s to the early 50s. *Psychology and Aging*, **7**, 46-55.
- 廣田靖子 2003 中年期男性の自己の捉えなおしの様相—年代とデモグラフィック要因に着目して— 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 10.
- 堀内和美 1993 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦, 看護婦, 小・中学校教師の比較



- 教育心理学研究, **41**, 11-21. (Horiuchi, K. 1993 Ego identity changes reported by middle-aged women : Comparison among housewives, nurses, and school teachers. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 11-21.)
- Howard, A., & Bray, D. 1988 *Managerial lives in transition : Advancing age and changing times*. New York : Guilford.
- 井上祥治 1992 自己概念 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版 Pp.48-56.
- 上瀬由美子 1999 中高年期における自己認識欲求 心理学研究, **70**, 195-202. (Kamise, Y. 1999 Self-recognition need in the middle-aged and elderly. *Japanese Journal of Psychology*, **70**, 195-202.)
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値—今, なぜ子を産むか— 教育心理学研究, **47**, 170-179. (Kashiwagi, K., & Nagahisa, H. 1999 Value of a child for women : Why have a child now ? *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 170-179.)
- Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C., Berry, A., & Harlow, T. 1993 There's more to self-esteem than whether it is high or low : The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1190-1204.
- 北山 忍 1994 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, **10**, 153-167. (Kitayama, S. 1994 Cultural views of self and psychological processes. *Research in Social Psychology*, **10**, 153-167.)
- Lachman, M. E., & Baltes, P. B. 1994 Psychological ageing in lifespan perspective. In M. Rutter & D. F. Hay (Eds.), *Development through life : A handbook for clinicians*. Oxford : Blackwell Science Ltd. Pp.583-606.
- Lachman, M. E., & Bertrand, R. M. 2001 Personality and the self in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development*. New York : John Wiley & Sons, Inc. Pp.279-309.
- Levinson, D. J. 1978 *The seasons of a man's life*. New York : The Sterling Lord Agency, Inc.
- Lyubomirsky, S. 2001 Why are some people happier than others? : The role of cognitive and motivational processes in well-being. *American Psychologist*, **56**, 239-249.
- Marsh, H. W. 1986 Global self-esteem : Its relation to specific facets of self-concept and their importance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1224-1236.
- 水間玲子 2002 自己評価を支える要因の検討—意識構造の違いによる比較を通して— 梶田叡一(編) 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版 Pp.115-151.
- Montepare, J. M., & Lachman, M. E. 1989 "You're only as old as you feel" : Self-perception of age, fears of aging, and life satisfaction from adolescence to old age. *Psychology and Aging*, **4**, 73-78.
- Mroczek, D. K., & Kolarz, C. M. 1998 The effect of age on positive and negative affect : A developmental perspective on happiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1333-1349.
- 中村陽吉 1990 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- 岡本祐子 1995 人生半ばを越える心理 南博文・やまだようこ(編) 講座 生涯発達心理学 第5巻 老いることの意味—中年・老年期 金子書房 Pp.41-80.
- 岡本祐子(編著) 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 尾崎仁美 2002 個人における将来展望の重要性をとらえる方法の検討—自己研究の知見を導入して— 梶田叡一(編) 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版 Pp.87-114.
- 沢崎達夫 1995 自己受容に関する研究(3)—成人期における自己受容の特徴とその発達の変化— カウンセリング研究, **28**, 163-173. (Sawazaki, T. 1995 A study of self-acceptance (3) : Characteristics and developmental changes of self-acceptance in adulthood. *Japanese Journal of Counseling Science*, **28**, 163-173.)
- Staudinger, U. M., & Bluck, S. 2001 A view on midlife development from life-span theory. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development*. New York : John Wiley & Sons, Inc. Pp.3-39.
- 菅沼真樹 1997 老年期の自己開示と自尊感情 教育

心理学研究, **45**, 378-387. (Suganuma, M. 1997 Self-disclosure and self-esteem in old age. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 378-387.)

若本純子 2003 成人期・中年期における「悩み」の等質性分析—子どもの有無と成長段階によるライフステージ別の検討(2)— 日本家族心理学会第20回大会発表論文集, 56.

Whitbourne, S. K. 2002 *The aging individual : Physical and psychological perspectives (2<sup>nd</sup> ed.)*. New York : Springer Publishing Company.

山本多喜司・ワップナー S. 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房

安田朝子・佐藤 徳 2000 非現実的な楽観傾向は本当に適応的といえるか—「抑圧型」における楽観

傾向の問題点について— 教育心理学研究, **48**, 203-214. (Yasuda, A., & Sato, A. 2000 Is unrealistic optimism really adaptive? : A negative aspect of repressor's optimism. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 203-214.)

### 謝 辞

本研究は、第一筆者が、2001年度お茶の水女子大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。執筆にあたっては、慶応大学の伊藤美奈子先生に貴重なご助言をいただきました。また研究協力者の皆様をはじめ、本研究にご助力いただいた方々に対して深くお礼申し上げます。

(2003.5.19 受稿, '04.7.12 受理)

## *Developmental Characteristics of Multidimensional Self-Concept in Midlife : Interaction Between Concern and Evaluation in the Domains of the Self*

JUNKO WAKAMOTO (GRADUATE SCHOOL OF HUMAN CULTURE, OCHANOMIZU UNIVERSITY) AND TAKASHI MUTO (SHIRAUIME GAKUEN COLLEGE)  
*JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2004, 52, 382 - 391

The present study investigated developmental characteristics of multidimensional self-concept in midlife. Participants were 1,006 individuals, 30 to 65 years old. Examination of developmental differences suggested that midlife consists of 2 stages : early and late. Late midlife especially showed significant differences compared to early and pre-midlife in terms of high self-esteem, high evaluation of self, and low concern with self. When the interaction between concern and evaluation in multiple domains of the self was examined, significant interactions were found in the following domains in the stages noted : social and inner self of early midlife males, inner self of early midlife females, and social self of pre-midlife females. Furthermore, those domains of self that showed significant interactions were found to be those at the beginning of midlife-specific changes, when people are likely to be introspective or experience conflicts. The results also suggested that people in early and pre-midlife are at risk for an unstable self-esteem when they have low concern with a domain of self that reflects specific experiences in midlife.

Key Words : midlife, multidimensional self-concept, self-esteem, interaction between concern and evaluation in the domains of self, adults at midlife